



思文閣出版
1,900円+税

ピーコンヒルの小径 新島襄を語る(八)

本井康博(大学神学部教授)著

このところアーモスト大学と同志社の関係について話をする機会が多く、関連の文献に目を通すことがしばしばある。「新島襄全集」を紐解くことがまず基本であることは承知しているが、居住まいを正して向かい合うべき聖典のような趣があり、気楽に手にとつて、というわけにはいかない。そんな私にとつて、本井教授の『新島襄を語る』シリーズの諸巻は、その名の通り、語り口調で書かれているだけに、親しみやすく、また最後まで一気に読み進め、たいへん重宝している。瀟洒な表紙絵

に加え、各巻につけられたタイトルがこれまた絶妙である。魂の指定席、「礎をあげて」、「あえて風雪を侵して」など感心するほかない。最新巻は「ピーコンヒルの小径」とあり、読む前から心はジョイ通りの坂へと自ずと向かう。

語り口調で書かれている、と書いたが、読み応えには格別のものがある。本巻では、新島がポストンで書いた「脱川の理由書」をめぐるバートレットの役割、バイロン・S・クラークが両親とクラーク記念館で、昨年めでたく邂逅(写真の世界のことだが)できた経緯、ウイリアムズとアーモストとの確執と切磋琢磨に触れたくだりなどが、とりわけ印象に残った。また、全編を通じて、キリスト教主義を基礎としたリベラルアーツ教育こそ、新島が一貫して望んでいた大学教育の姿であるということが通奏低音のように流れており、染み入るような凛とした読後感を残してくれる。

森田雅憲(大学商学部教授)

AMERICAN BOARD
アメリカンボード
200年

思文閣出版
5,000円+税

アメリカン・ボード 200年

同志社と越後における
伝道と教育活動

本井康博(大学神学部教授)著

アメリカン・ボードは同志社・新島襄と並び本井康博教授がライフワークとされてきた研究対象の一つであり、「アメリカン・ボード200年」はその集大成という性格を持つ。

本書の顕著な特色の1つは地域からの視点である。筆者は京都と越後という地域にあくまでもこだわり、地域に生きたアメリカン・ボードを描き出す。その叙述は飽くことのない探究心によつて、実に多面的で詳細な内容となっている。第2の特色は「第3部 資料紹介(ミッシ

ョン年次資料)」に認められる第1次史料の研究である。「京都ミッシン年次報告(1876年〜1891年)」と「北ミッシン年次報告(1883年〜1893年)」は長年にわたる綿密な史料研究の成果であり、これが本書を基礎づけている。これら2つの特色が本書全体に認められる第3の特色を導き出す。すなわち近代日本キリスト教史における具体的事例の宝庫という性格である。歴史の鼓動に耳を傾け生き生きとそれらを描写する。だから本書は具体的事例の宝庫であり、その分析や総合を積極的に試みようとはしない。むしろ歴史そのものの叙述でよしとしているように評者には思われる。

読者は、本文651頁という大著の隅々において、本井教授の研究に打ち込む真摯な姿勢に触れるであろう。この豊かな事例の宝庫を用いて日本キリスト教史研究の明日を開拓することが読者に課せられた課題に違いない。

塩野和夫(西南学院大学国際文化学部教授)



晃洋書房
2,100円+税

宗教の ポリテイクス

—日本社会と一神教世界の邂逅
小原克博(天学神学部教授)著

著者は同志社大学で学際的アプローチによる一神教研究の拠点CISMOREを率いる気鋭の研究者である。本書では、日本の多神教的風土のなかでの一神教の扱われ方、キリスト教西洋でのキリスト教やイスラームへのまなざし、さらには世俗主義と宗教の関係までを、政教関係を軸に俯瞰している。これだけ広い視野で宗教と政治を論じ、かつ平易に論点を明らかにした類書はない。私は、長年、ヨーロッパ諸国のムスリム移民に関

わる問題に焦点を当てて研究をしてきた。その私にとって新鮮であったのは、明治以降の日本の近代化における宗教と啓蒙との関係を論じた論考である。日本は、近代に入って啓蒙思想を受容したとき、同時に、西洋において宗教(キリスト教)が社会に通底する価値の源泉であることも知った。啓蒙思想は、神や教会からの分離によって人間が個として理性を十全に発揮することを担保しているから、近代化の過程にある日本人にはとまどいがあった。道徳を宗教より上位に置くことで擬似的な政教分離を行い、そのうえで道徳を国家主義のなかに位置づける—それが天皇制と結びついていく過程を描いた第一部は、多神教的な日本と一神教的な西洋という図式的な構図を超える鋭い指摘である。

内藤正典(天学グローバルスタ
ティーズ研究科教授)



雄山閣
1,600円+税

検証「前期旧石器遺跡 発掘注意事件」

松藤和人(天学文学部教授)著

前・中期旧石器遺跡埋没事件から10年という月日が流れた。2000年11月、前・中期旧石器時代遺跡の埋没事件が発覚する。この事件が考古学界のみならず社会に与えた影響は甚大であった。考古学が積み重ねてきたものがすべて失墜しかねないほどのものであった。そもそもこの埋没事件が起こったのは、前期旧石器存否論争という背景をもち、国内には比較資料がほとんど存在せず、中国・韓国などの石器との比較研究が疎かにされたことなどが根底にあったと著者はいう。そし

て、埋没発覚後におこなわれた検証作業の結果、20年以上にわたり遺跡が埋没されてきたことが明らかとなった。本書では、当時の学界の様相、また検証作業という厳しい過程が生々しく書かれている。

この埋没事件以後、日本における前期旧石器研究はほぼ停滞してしまふこととなる。しかし、埋没事件を乗り越え、石器観察・発掘技術の改善、関連する自然科学との共同研究のあり方など、新たな旧石器研究がはじまったともいえる。さらには、著者らを中心として日本旧石器学会さらにはアジア旧石器協会という東アジア的な視点による旧石器研究が進められていくこととなる。

第一線で活躍する研究者であり、検証作業をおこなった前・中期旧石器問題調査研究特別委員会の一員として検証過程に深くかかわった著者により書かれたものは本書が初めてであり、一読すべき書である。

手島美香(天学歴史資料館)



岩波書店
2,600円＋税

京都三大学 京大・同志社・立命館 橋木俊詔 天学経済学部特別客員教授 著

労働経済学者として、日本社会の階層の固定化に警鐘を鳴らし続ける橋木教授の新著が出た。かつて評者は、明治期に成立した日本の学歴社会が、脱階級社会の第一歩だったと知り、目から鱗が落ちた経験がある(「牧原憲夫『民権と憲法』」。たしかに、階級を問わない立身出世の可能性を、大学という存在は開いてくれるはずなのだ。

しかし、「格差社会」、「日本の教育格差」を始めとする多くの著作で、橋木教授が指摘するのは、大学進学をも、保護者の所得格差が左右し始めた日本の現実である。おそらく、格差社会がもたらす深刻な事態をさら

に見極めたいという想いが、橋木教授を、大学そのものの研究へと駆り立てるのだろう。

とはいえ、「京都三大学」は、橋木教授のこれまでの著作の中でも異彩を放っている。前著「東京大学」でも見られたように、大学設立の歴史と経緯、そしてとくに、大学が育成してきた人材に焦点が当てられる。そして、著者自身も触れているように、東京の大学を語る際には異なる温かみと、時に厳しい視線が投げかけられる。

帝大時代から多くの著名研究者を輩出してきた京大に比べ、残念ながら同志社大学への言及は少ない。だが、第6章「同志社の苦悩と発展」で、時に立命館大学と比較しながら指摘される同志社の停滞と課題から、私たちは多くを学ぶはずだ。

橋木教授によつて描かれる小都市京都の三つの大学の来歴は、大都市東京への一極集中が強まる現在、京都の大学としての魅力を引き出す鍵を与えてくれているのだと思う。

岡野八代 天学グローバル・スタ

ディーズ研究科教授

無縁社会 の正体

血縁・地縁・社縁はいかに崩壊したか

橋木俊詔



PHP研究所
1,300円＋税

無縁社会の正体
血縁・地縁・社縁はいかに崩壊したか

橋木俊詔 天学経済学部特別客員教授 著

2010年初頭に放映されたNHKの番組「NHKスペシャル 無縁社会」新たなつながりを求めて」は、現代日本の高齡化社会の衝撃的な姿を明らかにした。本書は、タイトルからもわかるように、①さまざま統計資料を用いて無縁社会の実像に迫り、②その背景を明らかにし、最後に、③「無縁社会に期待される政策」の検討と提案に及ぶ。

第1章は高齢単身者、2、4章は家族、3章は地縁、血縁、社縁を取り上げているが、いずれも一般の読者の抱くであろう

関心と疑問に則して、わかりやすく叙述されている。特に、当該問題にかかわる適切な統計資料が用いられ、著者の定評のある自然な筆致で説明される。

第5章では今後の「政策」の方向が論じられている。NHKのドキュメントではこの面が弱いので、本書でも最も興味深い部分となっている。そこではアメリカ型の自立を尊重する社会をめざす方向は問題が多いとして退け、「最後の皆は公共部門とNPO」と強調する。その場合の公共部門とNPOの関係についての指摘(「運営方法へのアドバイスを行ったり、補助金支払いの可能性があつてよい。さらにNPOが寄付金を集めるのに際して手助けすることがあつてよい」)も興味深く、また、民生委員の仕事に対して俸給を支払うという著者の提案も注目される。以前からの「公共性」と「新しい公共性」との関係を考える際に参考になると考えられるからである。

理橋孝文 天学社会学部教授



英宝社
2,800円+税

ディック・ターピンの ヨークへの早駆け

南井正廣(ニウエグロローバル学部教授)著

伝説とは不思議なものだ。いつ、どのようにして、なぜ、ある一人の人物や一つの出来事に関する伝説が出来上がるのか——それは偶然的産物のように見えながらも、その時代を生きる人々の願望や憧れのなかから生まれるべくして生まれるものでもある。本書の題名にあるディック・ターピンとは、18世紀前半に名をはせた追い剥ぎである。幾度となく官憲の手を逃れたターピンであったが、最後は捕縛されて絞首台の露と消えた。数々のチャップブックやバラッドの題材となり、存命中からす

でに伝説化していたこの人物は、19世紀前半に活躍した小説家エインズワースのベストセラー『ルックウッド』に描かれることで、その人気を不動のものとする。あまたの追い剥ぎのなかで、なぜこのディック・ターピンが現代にまで語り継がれる英雄的な存在になりえたのかという謎を、南井氏はチャップブックや、当時の犯罪人列伝『ニューゲート・カレンダー』、裁判記録、新聞、雑誌など、実に様々な一次資料を詳細にわたって検証し、解き明かしていく。氏の名探偵さながらの緻密な分析と議論によって浮かび上がってくるのは、一人の犯罪人の姿だけではなく、彼を英雄へと変貌させていった社会全体の姿でもある。ディック・ターピン英雄伝説化の物語は、大きく変動を遂げつつある社会のなかでささやかな冒険と夢を追い求めながら生きていった当時の名もなき人々の物語でもあるのだ。

玉井史絵(天学グローバル・コミュニティ
ニケーション学部教授)



集英社新書
720円+税

イスラム—癒しの知恵

内藤正典(スタタデイイブル研究科)著

世界人口の四分の一近くを占め、現代世界に多大な影響を与えるイスラムに知的好奇心を抱いている人は多い。しかし、イスラムから積極的に学び、それを我々の生き方を見直す糧としている人はどれくらいいるだろうか。本書は、我々がよりよく生きるための知恵の宝庫としてイスラムを紹介する実践の書である。イスラムの「癒しの知恵」を知ることによって、読者は既成のイスラム像、特に過激・厳格といったイメージを修正させられるだけでなく、イスラムの魅力を著者と共に味わうことになるだろう。

本書では、日常生活にかかわ

る具体的な事例が多数取り上げられている。全体を通じてわかるのは、ムスリムは決して無理をせずに、時には自分の欲望に素直になり、互いを支え合う共同体を持っているということである。本書冒頭で取り上げられている自殺の問題は、日本社会とイスラム社会のコントラストを明瞭に示している。年間3万人を越す自殺者を生み出す日本社会の問題は深刻そのものである。では、なぜイスラム社会では自殺者が少ないのか。「神にゆだねる」ことによる思考停止は、自分を必要以上に追い詰めない。また、イスラム社会は「助けて!」と叫べる社会である。自己責任の重荷を背負わされ、我慢することが美德とされる社会とは、ずいぶん違う。随所に挿入されている著者の体験談は、かなりおもしろい。著者はムスリムではないが、その生き方の知恵を体得していることがわかる。

小原克博(天学神学部教授)



朝日新聞出版
1,500円＋税

1ドル50円時代を 生き抜く日本経済

浜 矩子(天学ビジネス研究科教授)著

「1ドル50円時代」という言葉は刺激的であるが、本書の内容を象徴的に表している。本書では、近年の為替変動を規定する各国通貨の状況と「円高」の原因分析がなされ、この時代に必要な日本の新しい社会システムが提起される。

近年、為替レートが1ドル80円前後で推移しているが、これは「円高」ではなく「ドル安」であるという。すなわちこれはドルの長年続いてきた過大評価に対する修正の最終段階である。円が他通貨に対してひとり高い状況を示すのは、日本が世界で最大の債権大国であるというところにある。いわば「資産大国」であることが「円高」をもたらしている。

この状況の中でいま必要なのは、「円高は日本経済が成熟してきた当然の帰結である」という認識と、「今後は円高環境に日本経済を適合させていくことが賢明だ」という発想である。

日本が成熟債権国となりえたのは、戦後の高度な経済発展の結果であり、これを支えたのは「集権的管理社会」であった。しかしいま必要なのはここからの脱却であり、めざすは「協調的分権社会」である。これは管理されずに自己展開しながら、お互いを生かしかう社会システムである。企業における横型連携と国際化、競いまた協調する質の高い地域の重層化した社会など、著者は言葉を尽くしてこれを明らかにしている。

本書は新しい日本の社会システムの提言として貴重である。さらに具体的な制度設計の話を書きたいというのが一読した者の思いである。

鵜飼哲夫(天学商学部教授)

経済 死に至る地球

浜 矩子

岩波書店
500円＋税

死に至る地球経済

浜 矩子(天学ビジネス研究科教授)著

世を震撼させた「リーマンショック」。以後、様々な蘇生措置によつてその影響は薄れつつあるかみえる。しかし危機は去つたのか。著者は、その後の2年間に世界経済の構造的欠陥が表面化しつつあるという。

一つは、国家財政の破たんがギリシャなどで顕在化し、世界はソブリン・リスクに覆われている。このような状況では、国の財政が恐慌の原因となる「財政恐慌」と呼ぶべき破たんが起こりうる可能性がある。

二つ目は通貨問題である。経済も金融もグローバル化し、自国通貨の価値に対して国々の制御力が著しく弱まった今日、

基軸通貨終焉の時代である。しかし次への仕組みは見出されていない。

三つ目は金融である。リーマンショック後、世界の金融は金融再暴走と金融大縮減という対照的な方向の中で不気味に揺れてきた。この間、様々な金融制度改革がなされたが、その効果について不透明なままである。

混迷を深める世界経済の中で、著しい経済発展を示す中国に期待する声もある。しかし中国は多分に非中国資本中心の他人依存型経済であり、分配の不平等も際立ちつつある。中国経済の行く末次第では世界の不安定要因になる。この中で日本はどうするのか。最終章ではその方向性が示されている。

本書は、今日の世界経済の諸相を鮮やかに描き出している。しかし「ブックレット」という制約から、これらの現象を生み出す基底的なものについてまで言及されていない。読者は著者の他の書物の併読が必要になる。

鵜飼哲夫(天学商学部教授)



思文閣出版
3,000円+税

William Smith Clark の教育思想の研究

—札幌農学校の自由教育の系譜
小枝弘和(大学史料調査員)著

社史資料センターの社史資料調査員・小枝弘和氏は彼の学部時代からW.S.クラークの教育思想に関心を持っていたが、標記の書は彼の博士論文である。クラークといえば明治9(1876)年7月札幌農学校にやって来て、別れ際に「Be wise ambitious」という言葉を残したという話は多くの日本人に記憶されている。

しかしクラークが慶応3(1867)年の秋、アーモスト・カレッジに入学した新島襄に化学(chemistry)を教え、明治10(1877)年5月上旬彼が帰米の途中京都に、そして今出川校地に来て、英学校の経営に

苦勞している新島を励ましたという話は同志社人にもあまり知られていない。新島は明治18(1885)年3月、二度目の渡米の際アーモストで病床にあったクラークを見舞っている。このように同志社とも深い関係のクラークの総合的研究はこれまでなされてこなかった。今回小枝氏は、アーモスト・カレッジ、マサチューセッツ州立アーモスト校及び北海道大学の古文書部でクラークの史料を渉猟し、クラークの生い立ちから説き起こし、彼の思想形成の時代であるウイリストン・セミナリー、アーモスト・カレッジ、ドイツのゲッティンゲン大学への留学及び思想実践の時代であるアーモスト・カレッジ教授時代、マサチューセッツ農科大学学長時代と札幌農学校教頭時代を克明に検証している。自由教育をキリ概念にし、キリスト教と民主主義を補助概念に用いつつクラークの思想と実践を分析し、教育者クラークを総合的に研究した彼の功績は大である。今後クラークの研究者は小枝氏の著書をひも解く事になろう。

井上勝也(大学名誉教授)



思文閣出版
2,800円+税

同志社女学校史の研究

宮澤正典(女子大学名誉教授)著

この書で扱う期間を、「同志社女学校」という名称が消失した1930年以降、1945年までを含むとする著者の概念規定には、十分根拠がある。それは、創立時から戦中までの約70年間、同志社の内外で認知されていた「同志社女子部」時代を意味するからである。

著者は、その女子部(現女子中高と女子大学)に45年間教員として勤務し、元来の西洋史研究に加えて、日本の近代化と女子教育の好例として、同志社女子部の歴史に早くから着目し研究を続けてこられた。本書に収められている論考の最も早い初出年(1976年)からも、女

子部を研究の対象にした期間が35年に及ぶことが分かる。しかも、著者の論考は全て原資料を丹念に精査した上での堅実な論証であり、女子部の歴史を学ぶものにとつて全幅の信頼を持つて依拠することのできる書物となっている。

著者の関心は、女子部の教育の根幹となる学則・学科課程と、女子高等教育に向けての変革、戦時中の女子部の苦闘の歴史、外国人留学生に関するものと広範囲にわたっており、かつ同志社のキリスト教女子教育の基となる「新島襄と同志社女学校」を論じた章ももちろん収録されている。また個別に松浦政泰・松本亦太郎らの教員、特色ある卒業生の活躍が具体的に描かれているので、歴史を身近に感じさせる。

惜しむらくは、この書に登場する人物・事項が索引によって検索出来れば、研究者にどれほどか利便を与えることになるだろうかと残念である。

坂本清音(女子大学名誉教授)



岩波書店
4,600円+税

狂気の西洋音楽史

椎名亮輔 女子大学文学部教授 著

西洋には狂気に陥った音楽家が何人かいる。だがこの本はその悲劇の人生を順に並べたものではない。著者は狂気を意味のしくみの分解と定義する近代医学と関係づけて、音楽的意味の成立と崩壊を追跡した。主人公は作曲家シューマンと、フロイトの分析で有名なパラノイア患者シュレーバー。ありえないような取り合わせだが、両家には交わりがあった。そして何より同じ精神病院で亡くなった。シュレーバーは病棟でピアノを弾いている時だけは、神の声音の幻聴を遮断できると書いている。これを妄想にすぎないとい

づけるのが常識だ。ところが教授はいつからこんなすごい力を音楽は持てるようになったのかと問いを立てた。あつげに取られる斬新な設問だ。

歌詞の内容ではなく、器楽の音のつながり自体に意味が宿るという絶対音楽の概念が、妄想の前提にある。18世紀末に完成したソナタ形式はその代表だ。その直前に狂死した作曲家、通称「ラモールの甥」を意味と無意味の境界線にいたと位置づける章は意表を突く。シューマンはアイロニー、ユーモアという文学的着想で、絶対音楽をねじった。崩壊はマラー、シェーンベルクで止めを刺され、それ以降は意味を空洞化した「現代音楽」が現れる。狂気が常態化したようなものだ。

本書は数多くの逸話を精神分析と音楽美学の知識できっちり縫い合わせながら、この見取り図を刺繍している。ピアニストならではの卓見が光る。

細川周平(国際日本文化研究センター教授)



思文閣出版
2,500円+税

歴史のなかの天皇陵

山田邦和 女子大学現代社会学部教授、高木博志 編

本書は、現在の陵墓研究の水準を示した好著である。天皇や

皇族の墓である陵墓は関西では農村部の小山として、また都市に点在する緑地として身近な存在である。しかし、研究者であってもごく限られた機会にしかその姿に触れることはできず、また一般の方にはその機会ほとんどない。この状況はなぜ生じたのか？ 往古の姿はどうであったのか？ それらの疑問に明快に答えてくれる一冊である。

問題を簡明に整理した短い総論を編者の山田・高木の両氏が

綴り、その両氏に考古・古代・近世の研究者が加わって各論が多角的に述べられている。さらに、この5人の執筆者による座談会では、各人の発言のなかから問題のポイントが浮かび上がってくるようになっていく。

また、各所に挟まれたコラムの執筆者も多彩である。ベテランや気鋭の研究者はもちろん、宮内庁書陵部の主任調査官と新聞記者が含まれている事が特に注目される。

大きな特徴は、文化財としての陵墓と皇室の陵墓の両面に留意した議論が行われていること、また地域社会における陵墓の意味を問うている事であろう。このために陵墓のほとんどが存在する近畿圏の地域社会の形成を側面から問う議論ともなっている。本書が起点となって、陵墓研究・地域社会研究の新たな段階が始まることを期待したい。

福島幸宏(京都府立総合資料館歴史資料課主任)